

# 男性的思考と女性的思考とのバランスを

■  
尾高 煌之助

高度成長は、国内市場が広がったのがひとつの大事な梃子（前提条件）だった。しかし、高度成長があってこそ有効需要が拡大した。このキャッチボールがどのようにして始まったのかは、まともにも考察されることがなく、その結果だけが分析されてきた。

高度成長の開始は、どのように始まってよかったのかも知れない。いったん「何か」がきっかけで「投資が投資を呼ぶ」状況が生まれると、成長のメカニズムが動き出した。その「何か」は、朝鮮戦争だけではなかったろう。ひとつには、人びとの心に灯がともったことにあったであろう。そして灯がともった一因は、所得倍増論とそのタイミングにあったのではないか。「これはワークする（workable）ようだ」と「みんな」が感じたとき、エンジンがかかり、徐々に収入が増え始め、期待が現実に転化した。こうして経済成長のメカニズムが回転し続けたのではなからうか。

もしそうだとすれば、思想の力は大きい。それはたんにマッチの役目を果たすに過ぎないかもしれないが、それがあってこそ人を動かす。逆に、<sup>アイデア</sup>思想の裏づけがない実利だけによる誘惑は、何人かの人たちを小細工に引きずり込み、それが社会的マイナスの効果を生むリスクが伴う。

ところで、高度成長が実現し、私たちがそれに慣れ親しんだとき（すなわち、高度成長が回転する諸条件が「制度化」したとき）、改めて「何らか」の要因が働いて、システム疲労もまた始まったように思われる。このときの「何らか」は、合理主義（分析至上主義）、科学万能主義、あるいは理性主義など——一言で言えば男性的思考の過剰に日本労働研究雑誌

求められるのではないか。大量生産の成功、ブランドの流行などの延長で、あらゆるものを数量化し、ひとつの尺度ではかり、比較する傾向が強くなった。最近はやりの評価至上主義はその一例である。電算機による医療診断も同類かも知れない。

だが分析的手法は、あくまでも単純化のための便法にすぎない。元来、個性と歴史が重要なケースでは、ひとつの尺度で押し通すのには無理が伴う。それなのに評価をまじめに（しかも誠実に！）やろうとする結果、不幸な結果が生まれる。多くの書類が作成されるが、それを丁寧に読む暇のある人などはいない。

合理主義の結論が（そしてそのみが）正しいと考え、正義感を背景に自分の主張を通そうとすると、その究極は原理主義となる。妥協のない闘争がここに生まれる。どうやらこれは最近の世界に共通の多発現象である。

人や社会現象の「評価」は、「客観的評価」とはまったく反対に、「良いかげんに」（「いいかげんに」ではなく！）なされるのがよい。この点、トヨタ自動車の人事評価の事例はおおいに参考にされるべきであろう（小池和男『海外日本企業の人材育成』東洋経済新報社、2008年、p.129ほか）。

理性主義と対極にある思想的特徴は、感性、センス、情緒などである。美の観念、詩情の世界、芸術のタッチなどに通ずる道がこれである。もしこれを女性的思考と呼べば、21世紀の社会は、男女両思考法のバランスが求められているのではなからうか。